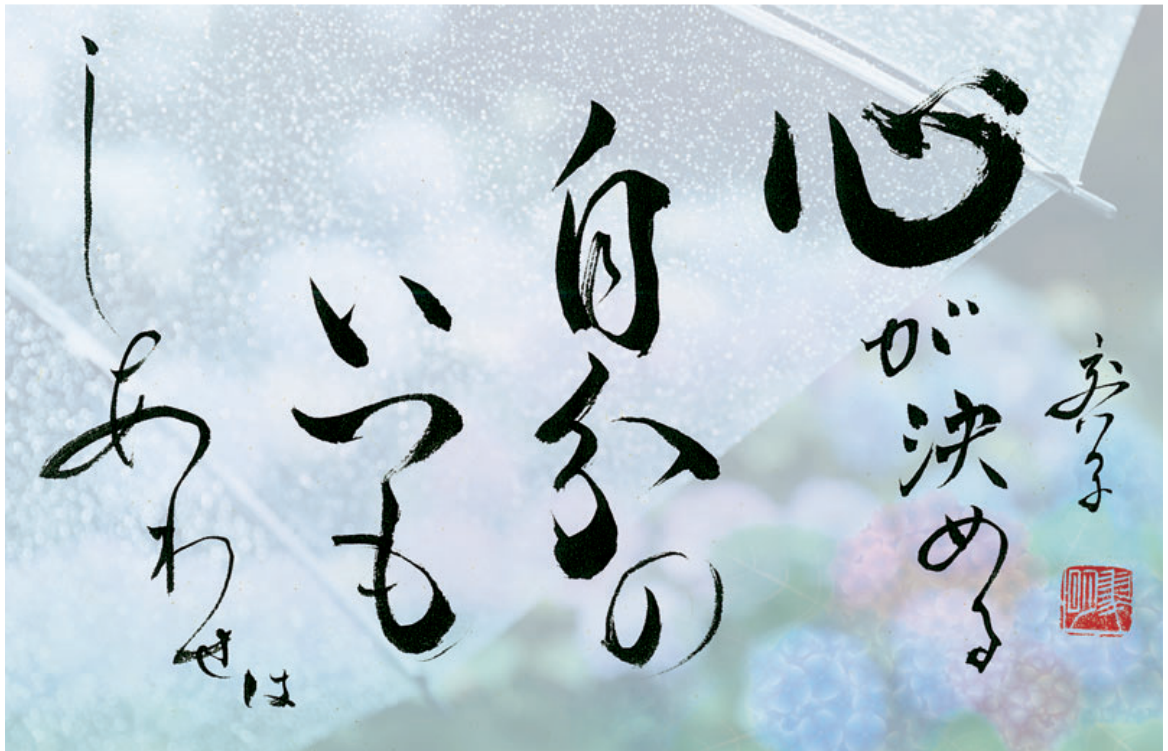


# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年  
6月号  
通巻610号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年6月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷 監修  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



「しあわせは いつも 自分の 心が決める」(相田みつをの言葉) 三重県名張市 且田容子さん作品(文・5頁)

昭和42(1967)年6月23日 月次祭法話より

死んでお終しまいではない — 皆お役目を持って生まれる —

法主 矢追日聖 (満55歳)

神ながらの神様とは

今日は六月の月次祭でございます。今年はどうも早ばつらしいんです。人間の心と天の心がどこかで食い違っておるような感じがします。世界の情勢を見ましても何かにつけて乱れておるんです。アジアではベトナムの問題、中東ではイスラエルとアラブ諸国の争いとか、我々は新聞やテレビ・ラジオの程度しか情勢は分かりませんが、いま人間の世界は非常に騒々しくなってきたように思います。

私の申します神様とは日本人だけが信仰して日本人だけが持つておる、そういう意味の神さんではありません。例えば戦時中は大東亜共栄圏を確立するための聖戦だということで、とにかく日本人の思うように神さんに力になってもらおうと、伊勢神宮を始めとして盛んに祈願をしておったのですが、日本だけを守って外国を守らないというのは本当の神さんとは言えないんです。

神ながらを根幹としておる宗教の神様、いわゆるご本尊は一部の人だけに利益を与え一部の人には与えないで罰をあてるなど、とらわれの多い我々人間が思っておるような神様とは違うのです。

本当の神様というのは太陽のような存在なんです。日本の領土にも照るし山や海、世界中を照らしている存在を神ながらの宗教では神様と言っております。

日本人の今日までの信仰の在り方は自分だけがうまくいけばいいという、非常

に社会性に欠けた利己主義な考え方で、自分達の願いや幸せのために神様を利用してきたことが多いと思うのです。そのような信仰の在り方では本当の神様の心には通じません。だから日本の過去の歩みを見ても、私達が希望するような住みやよい社会にはなつてこなかったのです。

いつも申しますように、人間は自然の中から生まれてきている、まずこれを第一に考えなければならぬと思うんです。この地上の現象界に神様が私達を生ませた、ということは天の心・神様の心を持って私達は生まれたのであって、神様の心によって末広がりにみんなが幸せに仲良くいくようにと、私達は育てられているのです。

ところが言葉もあり考える力も持つておる人間が、なぜ神様の心と遠ざかった社会を作っているのか、それを考えなければならぬと思うのです。

## 「味」の世界に入るとは

ここからは非常に大きい漠然とした話で、ちょっとまあ皆さんには分かりにくいのですが、ものを考えるときの出発点についての話です。

私自身、今日までの宗教の世界での遍歴を考えてみても、実際のところは口では言われないものがあるのです。結論を言えば、宗教についてはいわゆる思惟一念と言いますかね、信じるまではもう理屈も何にもなしに盲目が本当はいいのです。

よく世間の人が例に出しますが、梅干しひとつでも人間の知識で観察すれば色や水分や酸など、いろんなものを分析してなんぼでも説明はできませけれど、梅干しの味というものは恐らく知識や科学では説明できないと思うんです。

本当に宗教に入る場合には、その「味」の世界に入っていくのです。哲学や学問知識にとらわれ

ておるあいだは、信仰のほんの入り口なんです、序の口です。けれども最初から盲目で飛び込めばとんでもない淵に落ちます。だから信仰の入り口には理性がなきゃいけない、常識もなけりゃいけない、あるいは学問も哲学も、信じる世界に入る準備として必要だと思ふのです。

科学や哲学の学問を専門に飯を食うてる人達は、一生懸命に研究する世界で止まっていけばいいんです。その人達はそれでいいんです。けれどもあなた達の多くは、ひとつの宗教で本当の信仰の世界に入りたくて願つておられると思うので、そこへは理屈も何も一切いらんというところまで行き着いた人だけが、芯を掴んで入ることができるとは思ふのです。

私なんかは一応そういう段階を通り越しましたので、皆さん方の前に立つてこうして話すこともあんまり好かないのです。しかし宗教で行かなければならないのが私の宿命ですので、何かのお役に立てばと思つていつも話しておりますが、あくまでもこれは知識の世界に止まる話です。あなた達の考え方の整理のために話すのであって、いまここでどれだけ私の話を聞いても、本当の信仰の世界に入ることには恐らくできないんです。話や理屈や哲学とかを超越したところまで心境が開いて進んで行けば、これはもう本当の信仰の世界に入つていけるのです。

## 人は生まれ変わる

今日まで再々話したことがありますので改めて申すまでもないのですが、人間は何回か生まれ変わつてくる。これを自信を持つて皆さん方に伝えます。このことを信じられる人が本当の信仰に入る人です。

常識で考えれば、人間みたいなも生まれ変わつてくるはずはない、死んだら死んだらべえやということになるのですが、生まれ変わると信じてか信じないとかでは、まだまだほんの研究の過程です。そんな薄っぺらなものじゃない、我々人間は必ず生まれ変わるのですよ。

いつも話したように、私自身が過去において人間界にまあ五回か六回は生まれ変わつて出たことは分かっています。皆さん方も同じことなんです。人間は一代ぼつきりじゃないことを私は断言します。

いまは生きておるけれど時期が来れば死に、死ねばまた何かの形に生まれ変わつてくる。いまは人間であっても次は馬や牛に生まれる人もおれば、前の世に馬や牛であったものが、今世は人間に生まれて来る場合もある。人間だから人間に生まれるということは大間違いなんです。前の世に男であった人が今世では女になって生まれ、女が男になったり、あるいは過去の夫婦が今度は親子になってみたり、殺したり殺されたりした敵が夫婦や親子になって生まれたり、そういう仕組みは我々の知識能力のおよぶところではないのです。霊界の現実を見て信じる以外ないと私は思う。

これを心霊科学のように体系をたて学問として、我々の知識で納得できるようにすることは私が死ぬまでかかつてもできない。実にもう複雑怪奇で、この場合はこう、この時はこうと、ひとつひとつ現実を捉える以外に霊界のことは分からないのです。

私が見ている中でも、今年死んで三年先で生まれ変わる人もおれば、千年ぐらいに一回しか出て来ないような人もおる。規則も法則も何もなくて、その人の靈魂、霊体の事情によるんですね。これには霊の世界においてひとつの司があつて、そう

いう司の支配によっているんですね。

これを押し付けてあなた達に信じてくれとは言いません。信じるということは人から聞いてしゃなしに、自分の中から湧いて出たものでなきゃいけない。法主さんが言うので自分では理解できへんけど大倭の信者だから信じなきゃいけない、となったらこれは信じないほうがいいのです。何も私が言うからと信じる必要はない。自分の中から出てきて、ああこれは間違いないんだと分かるものでなければ、本当に信じるということではありません。

耳から入って自分の知識で解釈していくような捉え方では、何かのことにぶつかったらぐらぐらとひっくり返ってしまう、もう駄目なんだと碎けてしまう。まあ分かんものは仕方ないけれども、人間は生まれて死んだらそれでお終いでなく、また次に生まれ変わってくる、大倭の矢追日聖という人が言うところくらいは記憶してもらえればと思います。分かる時が来れば皆さん分かるんです。

### 生まれ変わると信じ合えれば

この現界だけではなく死後にも世界があり、さらにその次もまた現界に生まれて来るという有転輪廻の実態を世の中の人達が掴み、お互いに信じることができれば、今の法律、道徳、倫理、教育など一切のものが根本からとんでん返しを打つと私は断言します。しかし私の知っている範囲では、宗教人でかなりの位置におられる人であっても、霊界みたいなもんなかなか信じられへんと言うてる人が多いんです。

現実の人間界では、土地の取り合いやら金銭の利害やらの争いで、民族と民族、国と国が互いに

殺し合う。そのような社会の動きは神様の心に反しておるのにこのような現象が出てくるのです。そのよつてくる原因を遡れば私達は生まれ変わるのだと信じないからです。いま死ねば霊の世界の生活があつて、またそこから人間界かどこかに転生するのだと、皆が本当に信じたならば、勝ったところで負けたところで何になるか。そんなあほくさい戦争なんて起こるのが不思議なんです。

生まれた以上はその人なりに持って来た運命があり、前の世から引き継いできたお役目を、またこの世において繰り返してやっていく、それが皆さんの心というものです。虫けら一匹でも押さえなければ命が惜しいから逃げるんです、自分の命というものが一番大事なんです。自分のお役目を果たそうと思えば健康であつて、持って来た寿命だけは生きなければいけない、神様は生かそうとされているのです。

天然自然の大神様から見れば、人類なんか地球の皮に湧いた虫けらと一緒にです。そのちっぽけな存在の人類が核兵器までこしらえて、あっちこちと喧嘩して狭い地球の土地の取り合いをする。そんなことの為にどうして人間が死んでいるのやら、神さんから見たら意味のないくだらんことです。

現実はそのうちであつても、せめて宗教の世界においては一人一人の心が神様に通じるようになってほしいというのが私の願いです。神さんの心に近づいたための順序として、いまここに実在している自分は前の世にいつべん霊の世界を通ってきた、そのもうひとつ前には現界に生まれておつたと、その繰り返してあることを先ずは頭だけでよろしい、観念だけでも持つてほしい。

いま現在の我々は何回か繰り返してきた過去の自分の全てを、団子みたいにひとつに丸めたもの

で、悠久なる過去からの蓄積なのです。それがまた次の世の出発点となって繰り返されるのです。このことは私が言うだけではなく、いわゆる大乘仏教でも説いておるようですが、知識で理解できて仮にそうだと信じたとしても、その人としての体験がないとなかなか信じられるものではないのかもしれない。

### 霊界の禊

祭典をしているちようどいま、霊界では禊をやっておるんです。私もうっかりしとったんですが、昔の六月の禊は旧暦だから、今日の禊は新暦の六月でちよつと早いんですが。

我々が働いて飯を食べるのと同じように、霊界にも霊界の生活があるんです。こうして我々がお参りをしているときにも、何千年か前の古代の日本人が栗石のたくさんある河原で禊をやっておる。伊勢神宮の五十鈴川のようなところを想定して話していますが、そこには白い着物を着て座っている人もおれば禪一つの素っ裸の人、白い鉢巻きを締めている人もいます。私が見ていると入神状態になっておるんです、そして自分の枉罪を口からみな出すんですね。

現代流に言えばあなた達が家庭の事情やいろいろな悩みを持っていても、人に話すとかつこうが悪い、隣近所に知れたら困るとぐうと抑えて口に出さない。すると自律神経なんかが狂って神経衰弱の第一歩になるけれど、古代の人達は簡単にさつと入神状態に入って、心が宇宙の気と一体になるんです。そうすると聞こえたらかつこう悪いと思つて抵抗しても、勝手に口がばんばんと恥さらしを言うてしまう、これは現在理性と本心との争いです。

恥になるからと理性がどんなに抵抗しても、何回も生まれ変わってきた本当の霊魂は宇宙の神さんと通じますから、この罪汚れはすべて祓わなしかんと奥の方から言わしてきよるねん。それにまた理性が抵抗して、河原ではみんな暴れてひっくり返ってドタバタやつとる。そんなときはいまま流に言えば自律神経なんか盛んに働く。すると肉体中の汚物やもろもろが毛穴から噴き出てきて、へばりつく糊のような熱湯みたいな汗をかく。現界でそのくらいの禊はおよそないと思うんですが霊界ではそうです。

そうして言うてしまつたらすつとするから川の中に駆け込んで身体をざあつと洗う、これがほんとの禊です。私は霊界の相を見て言うのですが今日なんかはそれをやっています。

また別の禊の一団はみんな白い着物を着て、松明を振りながら高い山の上に登って行く。そうかと思うと別の一団は温泉の湯の中で禊をしている。禊と言うても方法はいろいろですが、その内容は一貫して同じものなんです。

## いったい自分とは何だろうか

今日、こういう禊の相を出されるということとは、大倭の全ての人達や大倭と縁を結んでいる何万何億の霊界人へ、現界の私の口を通して霊波長を出せという暗示だと思つて禊の話をしています。

つまり六月はひとつのきつしよ(＝吉祥。大事な節目や機会)だから、皆さん方も物の考え方を転換させて行つてほしい。

小さい範囲で言えば大倭の場合では松の木が倒れてなくなつてしまい、西齋庭あたりの形が変わつてきておるんです。その場所へ、内の人も外の人人も皆が利用できる大倭会館を建てようという動

きになって、いま食堂の基礎工事をぼちぼちやっています。(※昭和43年2月、食堂使用開始)

そのように現界においてまず形の物として表れておるのですが、そこに現界と霊界との気の一致があるのです。というのは霊界の方に、上っ面の知識や観念じゃなく、人間の本质というものが、それぞれが持つて生まれた本心を互いに磨き上げる、道場のような場にしようという動きがあるんです。

※翌昭和43年2月23日、それまでの大倭申孝会から発展したすさのお会(森下新蔵会長)の発足の集まりが(交流の家で?)行われた。

※昭和43年5月、旧拝殿で第1回禊会が開かれる。昭和46年9月、第41回禊会がプレハブの新大倭会館で開かれた。

これをきつしよに、私も含めみんなが気持ちを変えんならんものがある。というのも、日本人の今日までの最も悪い癖は、自分を反省し自分を見つめることをあまりしないで、人のことばかり気にしてくだらんことを言うことです。

これは調和を一番欠くことになるのです。皆それぞれが必要あつてこの世に生まれてきている、何か一役を持つて生まれているという自覚をいめいが持つてほしい。それが神ながらの神様の心なのです。だから人のことを言う前に自分を掘り下げ、いったい自分とは何だろうか、大倭において自分はどんな存在でどんな仕事があるのか、そうしたことを考えてほしいと思うのです。

人のことを構いすぎて我がのことは分からないう、自分をよく見せようと背伸びしてみたり、能力者であるように見せたいとかね、そんな虚栄とかややこしいものが日本人にはあり過ぎると思う。神様のお役目を皆それぞれ持つていて、ひとりひとりが尊いのやから、人のことを悪く言えば

神様からお叱りを受けると思つてほしい。どんな人間がおつても、これも神さんの意思でこの世に生まれておるんやから、その人の悪口を言えば生まれさせた神様から罰があたる、だから一切人の悪いことは言うまい、自分の心で人のことを絶対に批判したらいけないとわきまえてほしい。

人間というものは形の物が出来てくるとそれに関連してごちゃごちゃ問題を起す、世界の宗教がみなそうなんです。どこに行つたつて集団に事が出てくると内容が墮落して問題が起くるのが世の常です。大倭はまだ駆け出しで形は出来ていませんからいろいろな問題は起こつていませんが、どんな人間も神様の意思で生まれてきて、縁を持つて大倭に集まつているのやから、我がの考えや認識で人をとやかく言うのは神様の目から見たら大間違いなんです。

だからいつも言うように、皆さん方は仲良く大らかにして和やかにいくと、できてもできんでもその目標に向かつて互いに努力してほしいと願うのです。これが神ながらの宗教の根本義なんですからね。

(文責・編集部)

## いぼれずみ

初めて大倭神宮に参つたときのこと。一人で入つて行くのに気後れしつづつ石段を上がり、畳の間に居られた小柄でお髭のご老人に挨拶をした。すると「あんたつ、こんなところへ来たかて、何んにもご利益あらへんで」と叱るような大声。

大倭初心者には優しいかなとちよつと期待していたので、想定外だったけれど、ストンと腑に落ちて、なんだかいいなあと思つた。

一喝、ありがとうございました日元さん。その時も今も、お宝・パワースポットそれに「ご利益」という言葉、嫌だなと思つています。(香)

あと  
あと  
足  
足

## ボランティアグループ

### 「あじさいの箱」40年の歩み

代表

且田容子

かつて法主様が、「行きたい場所に出かけ、食べたいものを食べ、女性に生まれて良かったと思つて死にや」とおっしゃった。それが決して当たり前のことではなかったのだと気づかされたコロナ禍も、1年も過ぎていきます。

昭和55年、大阪堺の関西電力社宅から「あじさいの箱」を発足しました。私は40歳。

日本でも最も初期に重度身体障害者施設として建てられた菅原園の落成式パーティに招待され、その帰り道、法主様と肩を並べて歩いている時、私は「大きな借金をしたのに、あんな上等なカーテンにしたの？」と率直な感想を言いました。すると「施設に置いていく親が安心するやろ」と言われ、びっくりしました。なんてやさしいんだらう、と。

私は五体満足な子供を授かっている。施設に預けていかれるお母さんの為に、私も何か協力したいと考えた末、サラリーマンでゆとりのない生活の中でお金を作るのには、働くしかない！ そう決心し、自宅のみんなに呼びかけました。湯浅晴子さん、溝口ツヤ子さん、高濱道子さん達がすぐ賛同してくれました。

習ってきたベターホームのパン作りを指導して、ピンに1人300円を入れてもらう。習った人達がまた自分の友人に同じことを伝えて……というような広がりが始まりました。

その頃から現在まで40年間、寄付を続けて応援して下さいの協和産業の当時社長の稲川淳一さんが、大阪心齋橋通りの名店を紹介して下さいました。「有名店の味が家庭でも」というキャッ

チフリーズで、私達が料理を習い、家族に何度もモニターになってもらったものです。それに近い味が出たところで皆さんに指導したのですが、おいしいと評判を得て週刊誌に載るほど騒がれたこともありました。

また湯浅さんの活躍で和歌山から取り寄せた新鮮な魚の干物、じゃこ、エプロンや小物の手作り品等でバザーを催すと行列のできるほど盛況で、売り上げと合わせてメンバーも増えました。その頃の法主様のご挨拶で「あんだ達の考えは本当に嬉しい。お金のない大倭としては100円ずつでもいいから、一人でも多くの人に参加してもらってほしい」とおっしゃいました。

私は二人の子供ができてからコツコツと師範の免許を取るまで習字を練習しました。溝口さんはご主人が和歌山に転勤になった時、てまり作りの勉強をしました。高濱さんは高槻から社宅まで押絵を指導に通ってくれる林俊子さんから免許を取得されました。湯浅さんには和裁や華道の師範の資格がありました。そこでカルチャーサークルを立ち上げたのです。

(※編集部注…生徒が講師料を払うと、講師の皆さんが寄付されるというやり方。ここに載っている以外、編物・日舞・太極拳・社交ダンス・着付け・歴史・俳句・英会話・音楽療法体操・話し方等の教室があったこともある)

その後、旧大倭会館を皆で徹底的に大掃除、きれいにし、喫茶倶楽部「和み」を始めました(平成12年)。藤田啓子さんや大津美代子さん等が食品の許可証を取ってくれて、うどんやカレー、コー

ヒーを出し、大倭に来た人の一つの居場所ともなり、バザー品を常に扱うようにもなりました。何とも有難い人との出会い、メンバーの方々とも何一つもめることなく、それぞれがいいように働いてくれたと思います。

しかし私も80歳になり、コロナも収まらず、この辺で終わりにしたら？という声があり、40年の節目、令和3年5月をもって「あじさいの箱」としてのボランティア活動は終わりにしようと思決しました。

私の習字教室には、30年も大阪東淀川から車で通ってくれる木村孝子さんをはじめ、15年、10年の方々もいらっしやいます。私も名張から車で、嵐の日も雨の日も雪の日も1日も休まず楽しみに通えました。5年前から、私の自宅の習字教室に小学生の時から通って師範にもなった鈴木晴香さんが、車の運転や教室を応援してくれるようになりお陰さまで無事故で過ごせました。

25年前にお亡くなりになった法主様が、私の手を握って「たのむわな」と言われましたが、微力ながら責任を果たせたかなと思っっています。皆々様の長年のご支援、ご協力に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

なお「和み」や「手まり教室」・「押絵教室」と、羽多野鎮子さんと、講師の「着物リフォーム教室」(但し定員一杯)、石川君子さんが講師の「真向法教室」は、できる間は今まで通り続けられるそうですので、どうぞよろしく願います。



5月17日、最後の習字教室風景

拍手合掌

## 大倭会通信

## 大倭会会長交代にあたって

川端一弘(談)

中西正和前会長が、平成22(2010)年3月23日に84歳で帰幽されました。20数年間の長きにわたって大きな存在感を示された中西会長でしたので正直なところ私には荷が重かったのですが、会長を引き継ぐことになりました。何とか大倭会存続を、と願う皆さんの声に押されてでした。

私の父の川端信春は大阪市東成区で大和精版という印刷会社を経営していましたが、草創期の大倭で森下新蔵さんや下村末一さんと共に三羽鳥と言われるほどだったようです。その父が病気で47歳の若さで亡くなった時、職人に会社をやめないうでくれと言われて母(はぎの)が続け、ひたすら私が大人になるのを待った……そういう家庭の事情を法主さんはよくご存知でした。大倭の皆さんに私は「カー坊」と呼ばれていました。

私がかもつと勉強を続けたい気持ちがありながら、会社を継いだのも見ておられたのでしょうか、ある時、法主さんは「これからはもう自分の好きなことをしたらええやないか」と言ってお下さいました。それで『大和植物志』を残した岡本勇治を紹介する講演に参加したことがあるのですが、私が奈良公園でイヌガシの写真を撮っている時(※平成17年3月号『とおやまと』の表紙写真)、脇から同じようにイヌガシを写し始めたのが、その時の講師の奈良教育大学教授、北川尚史先生だったのです。そんな知遇に導かれて50の手習いで、機械の不用な「植物分類学」を始めたりしました。中西前会長には亡くなる前、ご自身も病後であ

るのに、私の手術後の体調を気遣って頂きました。また若草山のレンジゲツジ保全活動について話すと、奈良公園まで散歩に行くとのことではどんな様子かと時々尋ねてくれたりしたものです。

そういう温かさの中で、宗教どころでもなく気ままにお付き合いをさせて頂いた私が、会社をたたんだ頃に大倭会会長の話が来たので、ついお引き受けしたというわけです。振り返ると、母も大倭会の前の、「大倭申孝会」や「すさのお会」の役員をしていたような気がします。大倭会が発足してからは私が役員に名を連ねていました。

しかし会長とは名ばかり、文化行事・文化講演会・視会にも不参加のことが多く申し訳ありませんでした。皆さんにはどんなことでも自由にやって頂いたらいいという気持ちでしたが、こんな風では会長を交代して、大倭会の新たな動きを考えて頂くのはいいかと思つた次第です。

今後は老齢を自覚し自分の一番の関心事に集中したい。これが私にとつての求道であると言えるかもしれません。その方面の近況のご報告です。

「日本の植物学の父」と言われる牧野富太郎から樟蔭高等女学校教諭で植物愛好家の竹下英一宛の多数の書簡が、大阪市立自然史博物館に遺族から寄贈されていました。大正年間から昭和31年(牧野95歳)頃まで親しい交流があったのです。それを8年前から整理し、翻刻刊行いたしました。

牧野富太郎竹下英一宛書簡



川端一弘

再録 昭和59年『とおやまと』3月号より

昭和59(1984)年1月23日月次祭法話の抜粋

## 大倭会への私の希望

法主 矢追日聖(満72歳)

一番最初は「大倭申孝会」という会ができました(※昭和41年、森下新蔵会長)。教宮というのを中心にして地域の人が集まっています。

それを統一して、今度は「すさのお会」という一つの会で行っていきましょうということになった(昭和43年)。すさというのは、壁土に入っている短い緒とか藁のことで、つなぎになるんです。だから一人一人の心の結びつきでやっていきましょう。会なんですね。森下さんが会長でやってください。

大倭教というものを信仰している人であろうとなかろうと、そんなものは関係なしに、とにかく平和に世の中いこうやないかと、お互いに心と心が共通できる人たちが、大倭を軸にして人間的につながりような会にしようということなんです。大倭教の信者だけの団体とは違うんです。

その後、すさのお会も15年以上になって動きが鈍いし、何か知らんけど、大倭の神さんは有難いと手を合わせて来るような人だけが集まっているような気がするんです。

そんなもんやなしに大倭の宗教のことはよくわからないけれども、例えば、大倭の社会福祉の仕事は有難いと、それに対して協力しようやないかとか、一般の人でもみんなが入ってくれるような会にしたいというのが私の本心なんです。新しい会は、そういうような広い意味の社会福祉というものを中心として、お互いに助け合っていくような会にしたいですね。(※この年の4月8日、大倭会発足、中西正和会長)

本の紹介

新泉社  
『虹の断片』塚崎直樹著

精神科臨床医、  
四八年の経験から――

おおよまと編集部 岸野春子

『おおよまと』平成15年9月号(1)と翌年3月号(6)まで連載された「大倭紫陽花邑に住んで」には、一座談会「前進友の会」の皆さんを迎えてという副題があります。座談会は、連載の時期からさらに20年以上前(昭和55年2月1日)に、旧大倭会館で行われたものです。

その折に「塚崎医師」という方が、「(前進友の会というのは)京都で精神障害者の共同生活を目ざしてやっている。医者も看護者も患者もごちゃ混ぜの動きから始まり、3年目に入った現在だいたい11人ぐらいが(アパートに)入って暮らしている。何かそういう生活に触れていくことによって病院を退院できていくことがある。もちろんそんなに楽観的に言える人ばかりではないが、精神医療を変えていく一つの力になっていくんじゃないか。今日は、紫陽花邑に学びにきた」というような説明をしておられます。

時が過ぎやっとなって、平成29年になって、塚崎医師からの「機関紙『おおよまと』をお送りいただきまして：略：まさか、あの時の様子が録音されていたとは驚きでした。：その後、「前進友の会」は当事者中心の会になって今も存続しています。私は、かなり以前から活動を離れています。：あの時の見学のあと、「あじさい村印象記」をまとめ：何度か交流の家は訪問……が、皆さんとはお目にかかっておりません」というようなお手紙に接する成り行きになったのです。

座談会当時、法主さんは満68歳、私も36歳で重

度身体障害者施設「菅原園」の寮母をしながら邑に住んでいた頃です。塚崎医師の「印象記」に、「B君は登校拒否で家に閉じこもり家族の誰ともしゃべらなかつた少年である。：略：今では多くの人の前で話ができるまでになっている」と紹介されているB君、現在佐渡在住の大滝哲也さんの発言だけを何かよく覚えていて「それは「自分が本当に治ろうと思わなければ治らない」というもので、前進友の会の若い女性も「そう思う」と言っていました。大滝さん自身も覚えているそうです。

そういうご縁のところへ、先日、『虹の断片』という本が届いて、それがまた石垣雅設さんの新泉社刊だと知り、「ほう！」でした。

＊

書き出しは、「何事も最初が肝心というが、物事を始めるのに、最初に抱いたイメージというのはその後のプロセスを予言していたり、問題点を凝縮している場合がある」。塚崎さんの場合はどうだったのか。

医学部の学生だった頃、夏休みに田舎町の病院に見学実習に行った。合間に海水浴をやることも目的の一つだった。と。前日に、一緒に実習する友人の軽自動車で海岸を見て回っていた時、トラックと衝突し、軽自動車は大破した。友人は無傷であったけど、塚崎さんは救急病院に搬送された。実習するはずの病院に患者として入院し、数日して退院。入院患者から見学実習生に変わるという経験をしたことよって、「医療現場で起こっていることの多元性や多層性の方へ導かれている感覚だった」。

『虹の断片』という書名は、斎藤茂吉の歌「最上川の 上空にして 残れるは いまだうつくしき 虹の断片」から取ったという。若い頃、精神

医療の諸問題に疑問を感じた。手作りの改善の方法だったものが、社会的に受け入れられ一挙に法制化し、国家の後押しや組織的に推進していく動きになる。「その結果できあがったものは、先駆者たちの考えたものと、似て非なるものになってしまう」。「現実を変えようとした人びとは、それぞれの『虹の断片』を見ただろう」、それを「私なりに跡づけようとした」。

＊

内容を、目次と小見出しの一部で感じて下さい。

【第一章】労働者の原型(金沢ベ平連で出会った労働者/上野英信の生き方 等)

【第二章】ハンセン病を手がかりとして(ハンセン病患者の声を聞く―北條民雄「いのちの初夜」/もうひとりのハンセン病患者、藤本としの本、

『地面の底が抜けたんです』/ハンセン病患者の宿泊施設「むすびの家」/戦前にあったハンセン病患者の自治組織/植民地下朝鮮のハンセン病施設「小鹿島更生園」 等)

【第三章】精神鑑定をめぐって(「島田事件」精神鑑定の批判的検討 等)

【第四章】心理療法(心から耳を傾けうる力とは/キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』 等)

【第五章】水俣病事件と向き合う(石牟礼道子/川本輝夫/緒方正人 等)

【第六章】病院改革(初めて勤務した精神科棟/精神科棟開放化の歩み/退院患者と行った月一回の食事会 等)

【第七章】自殺をめぐって(精神症状の一つとしての自殺/自殺のもたらす衝撃と余波 等)

【第八章】鶴見俊輔とうつ病(戦後知識人、鶴見俊輔の経歴・放蕩と自殺未遂・精神科病院入院・うつ病からの回復/同志社大学と家の会/北沢恒彦/黒川創 等)

# あじさい日誌

5月10日 日本オーチスさんが  
拝殿のエレベーター修理。

5月15日 大倭神宮月次祭。

5月23日 大倭大本宮月次祭。

この日の法話は昭和42年5月23  
日月次祭録音で、本紙5月号に  
「天地自然の心から遠ざかって  
いる人類」として掲載分です。

6月6日 大倭神宮月次祭。

加納さん夫妻（京都市）は遅  
れて神宮にお参り後、教務本庁  
に寄り林修三・杉本順一さん  
と、禊会で知り合った故杉浩史  
さんを偲ばれました。

夜、大倭会館で邑倭の会。

かねて瑞光院の天井から不審  
な足音：山崎正知さんが天井裏  
に入って調べたら、アライグマ  
の糞が大量に見つかりました。

5月8日～6月8日頃 湯浅芳  
郎さんが岡山と奈良の二拠点生  
活に終止符。奈良の家は上田カ  
ヨ子さんの住まいに。近所の団  
地からの引越しで、皆さんがお  
手伝いました。

大倭安宿苑では

5月10日 法人成立65周年記念  
日で成謙坊さんにお参り。式典  
は中止となりました。各施設毎  
に永年勤続表彰やお祝いメニ  
ューの昼食を工夫しました。

5月11日 初めてオンライン研  
修の形で、人事プロジェクト会  
議及び人事考課者研修。

（菅原園）  
5月27日 「新緑祭」で鉄板焼  
きの予定が中止となり、厨房よ  
り焼きそばとたこ焼きを用意。  
（須加宮寮）

5月17日 阪本理容さんのボラ  
ンティアで男性散髪。

5月29日 1・2部に分けて氷  
川きよしのビデオ鑑賞。

（長曾根寮）

5月（特養） 毎朝ラジオ体操や  
日付の唱和。カレンダーと組合  
せ今日は何の日か分かるように  
壁紙作り。空き時間にもりハビ  
リ体操、口腔体操、季節の歌等。

5月24・29日（二テ） 作品作り  
は、アサガオの壁掛け飾り。  
（茂毛路園）（八重垣園）

5月10日 法人成立65周年記念  
日、お祝いムードの日でした。

## こたまたまこたまたま

▼神奈川県横浜市 加藤彰彦

『おやまと』608号いた  
だきました。「日本とは何か」  
の最終回拝見し、考えさせられ  
ています。「交流の家」の役割  
心にストンと落ちました。今こ  
そ「交流の家」の存在は求めら  
れていると強く強く感じまし  
た。法主さん、鶴見さん、柴地  
さんの魂がぼくらに呼びかけて  
いるような気がしました。

この対談にめぐり会えうれし  
いです。何か始めてみたいと思  
っています。ありがとうございます  
でした。（筆名：野本三吉）

▼神奈川県鎌倉市 黒川 創

このたびは矢追日聖法主と鶴  
見さんの対談掲載の『おやまと』  
を「親切にご恵送いただき  
ありがとうございます。この  
ような対談が行なわれているこ  
と自体知りませんでした。内容  
もたいへん興味深く、また司会  
の柴地さんのお人柄もしのぼれ  
て拝読できてありがたいこと  
でした。お礼を申し上げます。（著書  
…新潮社「鶴見俊輔伝」他）

▼滋賀県大津市 高橋幸子

鶴見俊輔さんと矢追日聖さん  
の対談を送ってくださいいまし  
て、ありがとうございます。最  
初の「アジア主義」に、竹内好  
さんが出てきます。小さなグ  
ループですが、京都で「竹内好  
を読む会」をつづけていて、  
「明治国家を作った当初の別の  
可能性」という導入にまず魅か  
れました。最近見えた人から、  
「人の気持ちが変わりすぎて  
困る今井正の話」を鶴見さんが  
しているよ」と聞いたばかり。  
それが1回目に出てきたので、  
ニヤニヤしました。（中略）

矢追日聖さんにはお会いでき  
ないまま。しかし、むしろ最近  
になって日聖さんの凄さを教え  
てくださる友が幾人かいて…。  
1966年を振り返れば、私  
は同志社4年生。アルバイトに  
精を出してサボりながらも、ち  
ょうど鶴見ゼミにいたころで  
す。大倭紫陽花邑も山岸会も、

# あんない

\*月次祭（大倭神宮）

7月6日（火） 午後2時より大  
倭神宮にて。

\*大倭会主催祝会

7月11日（日） 中止とします。

※8月の祝会は例年通り大掃除  
祝ぎです。8月8日（日）でど  
うぞよろしくお願ひ致します。

\*月次祭（大倭神宮）

7月15日（木） 午後2時より大  
倭神宮にて。

\*月次祭（大本宮）

7月23日（祝） 午後2時より大  
倭大本宮拝殿にて。

## 東光大祭 祭典のご案内

令和3年8月22日（日曜日）旧7月15日

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津斎庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして

東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡ししますが、

密集を避けるため、後日、お越し下さるのはあ

りがたいです。拝殿にお預りしておきます。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご  
法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

【ご注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は

7月25日までとさせていただきます。